

或恋愛小説

——或は「恋愛は至上なり」——

芥川龍之介

青空文庫

ある婦人雑誌社の面会室。

主筆　でつぷり肥ふとつた四十前後しの紳士しんし。

ほりかわやすきち

堀川保吉　主筆の肥ふとっているだけに瘦やせた上にも瘦やせて見える三十前後の、——ち

よつと一口には形容出来ない。が、とにかく紳士と呼ぶのに躊ちゆうちよ躇ちよすることだけは事実である。

主筆　今度は一つうちの雑誌に小説を書いては頂けないでしょうか？　どうもこの頃は読者も高級になっていきますし、在来の恋愛小説には満足しないようになっていきますから、……もつと深い人間性に根ねざした、真面目まじめな恋愛小説を書いて頂きたいのです。

保吉　それは書きますよ。実はこの頃婦人雑誌に書きたいと思っっている小説があるのです。

主筆　そうですか？　それは結構です。もし書いて頂ければ、大いに新聞に広告しますよ。「堀川氏の筆に成れる、哀婉あいえん極きわりなき恋愛小説」とか何とか広告しますよ。

保吉　「哀婉極きわりなき」？　しかし僕の小説は「恋愛は至上しじょうなり」と云うのですよ。

主筆　すると恋愛の讚美さんびですね。それはいいよ結構です。厨くりやがわ川はかせ博士の「近代恋愛

論」以来、一般に青年男女の心は恋愛至上主義に傾いていますから。……勿論近代的恋愛でしようね？

保吉 さあ、それは疑問ですね。近代的懷疑とか、近代的盜賊とか、近代的白髮染めとか——そう云うものは確かに存在するでしょう。しかしどうも恋愛だけはイザナギイザナミの昔以来余り変らないように思います。

主筆 それは理論の上だけです。たとえば三角関係などは近代的恋愛の一例ですからね。少くとも日本の現状では。

保吉 ああ、三角関係ですか？ それは僕の小説にも三角関係は出て来るのです。……ざつと筋を話して見ましようか？

主筆 そうして頂ければ好都合です。

保吉 女主人公は若い奥さんなのです。外交官の夫人なのです。勿論東京の山の手の邸宅に住んでいるのです。背のすらりとした、ものごしの優しい、いつも髪は——
一体読者の要求するのはどう云う髪に結った女主人公ですか？

主筆 耳隠しでしょう。

保吉 じゃ耳隠しにしましょう。いつも髪を耳隠しに結った、色の白い、目の冴え冴え

したちよつと唇くちびるに癖くせのある、——まあ活動写真にすれば栗島澄子くりしますみこの役やくどころ所ところなのです。

夫の外交官も新時代の法学士ですから、新派悲劇じみたわからずやじやありません。学生時代にはベエスポールの選手だった、その上道楽に小説くらは見る、色の浅黒い好男子なのです。新婚の二人は幸福に山の手の邸宅に暮している。一しよに音楽会へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。……

主筆 勿論震しんさい災さい前でしようね？

保吉 ええ、震災のずつと前です。……一しよに音楽会へ出かけることもある。銀座通りを散歩することもある。あるいはまた西洋間せいようまの電燈の下に無言むごんの微笑ばかり交かわすこともある。女主人公はこの西洋間を「わたしたちの巢」と名づけている。壁にはルノアルやセザンヌの複製などもかかっている。ピアノも黒い胴を光らせている。鉢植やしえの椰子も葉を垂らしている。——と云うと多少気が利きいていますが、家賃は案外安いのですよ。

主筆 そう云う説明は入いらないでしょう。少くとも小説の本文には。

保吉 いや、必要ですよ。若い外交官の月給などは高たかの知れたものですからね。

主筆 じゃ華族かぞくの息子むすこにおしなさい。もつとも華族ならば伯爵か子爵ですね。どう云うものか公爵や侯爵は余り小説には出て来ないようです。

保吉 それは伯爵の息子でもかまいません。とにかく西洋間さえあれば好いのです。その西洋間か、銀座通りか、音楽会かを第一回にするのですから。……しかし妙子は——これは女主人公の名前ですよ。——音楽家の達雄と懇意になった以後、次第にある不安を感じ出すのです。達雄は妙子を愛している、——そう女主人公は直覚するのですね。のみならずこの不安は一日ましにだんだん高まるばかりなのです。

主筆 達雄はどう云う男なのですか？

保吉 達雄は音楽の天才です。ロオランの書いたジャン・クリストフとワッセルマンの書いたダニエル・ノオトハフトとを一丸にしたような天才です。が、まだ貧乏だったり何かするために誰にも認められていないのですがね。これは僕の友人の音楽家をモデルにするつもりです。もつとも僕の友人は美男ですが、達雄は美男じゃありません。顔は一見ゴリラに似た、東北生れの野蠻人なのです。しかし目だけは天才らしい閃きを持っているのですよ。彼の目は一塊の炭火のように不断の熱を孕んでいる。——そう云う目をしているのですよ。

主筆 天才はきつと受けましよう。

保吉 しかし妙子は外交官の夫に不足のある訣ではないのです。いや、むしろ前よりも

熱烈に夫を愛しているのです。夫もまた妙子を信じている。これは云うまでもないことでしよう。そのために妙子の苦しみは一層つのるばかりなのです。

主筆　つまりわたしの近代的と云うのはそう云う恋愛のことですよ。

保吉　達雄はまた毎日電燈さえつけば、必ず西洋間へ顔を出すのです。それも夫のいる時ならばまだしも苦労はないのですが、妙子のひとり留守るすをしている時にもやはり顔を出すのでしよう。妙子はやむを得ずそう云う時にはピアノばかり弾ひかせるのです。もつとも夫のいる時でも、達雄はたいていピアノの前へ坐らないことはないのですが。

主筆　そのうちに恋愛に陥るのですか？

保吉　いや、容易に陥らないのです。しかしある二月の晩、達雄は急にシユウベルトの「シルヴィアに寄する歌」を弾きはじめるのです。あの流れる炎ほのおのように情熱こもの籠こもった歌ですね。妙子は大きい椰子やしの葉の下にじつと耳を傾けている。そのうちにだんだん達雄に対する彼女の愛を感じはじめます。同時にまた目の前へ浮かび上った金色こんじきの誘惑かいなを感じはじめます。もう五分、——いや、もう一分たちさえすれば、妙子は達雄の腕かひの中へ体を投げたかとも知れませんが。そこへ——ちょうどその曲の終りかかったところへ幸い主人が帰って来るのです。

主筆 それから？

保吉 それから一週間ばかりたつた後、妙子はとうとう苦しさに堪え兼ね、自殺をしよ
うと決心するのです。が、ちようど妊娠にんしんしているために、それを断行する勇気がありま
せん。そこで達雄に愛されていることをすつかり夫に打ち明けるのです。もつとも夫を苦
しめないように、彼女も達雄を愛していることだけは告白せしむるのです。

主筆 それから決闘にでもなるのですか？

保吉 いや、ただ夫は達雄の来た時に冷かに訪問を謝絶しゃぜつするのです。達雄は黙然もくねんと
唇を嚙くちびるんだまま、ピアノばかり見つめている。妙子は戸の外に佇たたずんだなりじつと忍び泣き
をこらえている。——その後二月のちふたつきとたたないうちに、突然官命を受けた夫は支那しなの漢ハンカ
口の領事館へ赴任ふにんすることになるのです。

主筆 妙子も一しよに行くのですか？

保吉 勿論一しよに行くのです。しかし妙子は立つ前に達雄へ手紙をやるのです。「あ
なたの心には同情する。が、わたしにはどうすることも出来ない。お互に運命だとあきら
めましょう。」——大体そう云う意味ですがね。それ以来妙子は今日までずっと達雄に会
わないのです。

主筆　じゃ小説はそれぎりですね。

保吉　いや、もう少し残っているのです。妙子は漢ハンカオ口へ行った後のちも、時々達雄を思い出すのですね。のみならずしまいには夫よりも実は達雄を愛していたと考えるようになるのですね。好いいですか？　妙子を囲んでいるのは寂しい漢ハンカオ口の風景ですよ。あの唐とうの崔さい顥いこうの詩に「晴せい川せん歴れき歴れき漢かん陽よう樹じゆ　芳ほう草そう萋せい萋せい鸚おう鵒むし洲ゆう」と歌われたことのある風景ですよ。妙子はとうとうもう一度、——一年ばかりたった後のちですが、——達雄へ手紙をやるのです。「わたしはあなたを愛していた。今でもあなたを愛している。どうか自みづから欺あざむいていたわたしを可かわい哀いそうに思つて下さい。」——そう云う意味の手紙をやるのです。その手紙を受けとつた達雄は……

主筆　早さつそく速支那へ出かけるのでしよう。

保吉　とうていそんなことは出来ません。何しろ達雄は飯を食うために、浅あさくさ草のある活動写真館のピアノを弾ひいているのですから。

主筆　それは少し殺風景ですね。

保吉　殺風景でも仕かたはありません。達雄は場末ばすえのカフェのテエブルに妙子の手紙の封を切るのです。窓の外そとの空は雨になつている。達雄は放心したようにじつと手紙を見つ

めている。何だかその行の間に妙子の西洋間が見えるような気がする。ピアノの蓋に電燈の映った「わたしたちの巢」が見えるような気がする。……

主筆 ちよつとももの足りない気もしますが、とにかく近来の傑作ですよ。ぜひそれを書いて下さい。

保吉 実はもう少しあるのですが。

主筆 おや、まだおしまいじゃないのですか？

保吉 ええ、そのうちに達雄は笑い出すのです。と思うとまた思い出しましそうに「畜生」などと怒鳴り出すのです。

主筆 ははあ、発狂したのですね。

保吉 何、莫迦莫迦しさに業を煮やしたのです。それは業を煮やすはずでしょう。元来達雄は妙子などを少しも愛したことはないのですから。……

主筆 しかしそれじゃ。……

保吉 達雄はただ妙子の家へピアノを弾きたさに行ったのですよ。云わばピアノを愛しただけなのですよ。何しろ貧しい達雄にはピアノを買う金などはないはずですからね。

主筆 ですがね、堀川さん。

保吉 しかし活動写真館のピアノでも弾いていられた頃はまだしも達雄には幸福だったのです。達雄はこの間の震災以来、巡査になっていっていますよ。護憲運動のあつた時などは善良なる東京市民のために袋叩きにされているのですよ。ただ山の手の巡回中、稀にピアノの音でもすると、その家の外に佇んだまま、はかない幸福を夢みているのですよ。

主筆 それじゃ折角の小説は……

保吉 まあ、お聞きなさい。妙子はその間も漢口の住いに不相変達雄を思っているのです。いや漢口ばかりじゃありません。外交官の夫の転任する度に、上海だの北京だの天津だのへ一時の住いを移しながら、不相変達雄を思っているのです。勿論もう震災の頃には大勢の子もちになつていっていますよ。ええと、——年兎に双児を生んだものですから、四人の子もちになつていっていますよ。おまけにまた夫はいつのまにか大酒飲みになつていっていますよ。それでも豚のように肥つた妙子はほんとうに彼女と愛し合つたものは達雄だけだつたと思つていっていますね。恋愛は実際至上なりですね。さもなければとうてい妙子のように幸福になれるはずはありません。少くとも人生のぬかるみを憎まざにすることは出来ないでしょう。——どうです、こう云う小説は？

主筆 堀川さん。あなたは一体真面目なのですか？

保吉 ええ、勿論真面目です。世間の恋愛小説を御覧なさい。女主人公はマリアでなければクレオパトラじやありませんか？ しかし人生の女主人公は必ずしも貞女じやないと同時に、必ずしもまた姪婦でもないのです。もし人の好い読者の中に、一人でもああ云う小説を真に受ける男女があつて御覧なさい。もつとも恋愛の円満に成就した場合は別問題ですが、万一失恋でもした日には必ず莫迦莫迦しい自己犠牲をするか、さもなければもつと莫迦莫迦しい復讐的精神を發揮しますよ。しかもそれを当事者自身は何か英雄的行為のようになぬ惚れ切つてするのですからね。けれどもわたしの恋愛小説には少しもそう云う悪影響を普及する傾向はありません。おまけに結末は女主人公の幸福を讃美しているのです。

主筆 常談でしよう。……とにかくうちの雑誌にはどうしてそれは載せられません。

保吉 そうですか？ じゃどこかほかへ載せて貰います。広い世の中には一つくらい、わたしの主張を容れてくれる婦人雑誌もあるはずですから。

保吉の予想の誤らなかつた証拠はこの対話のここに載つたことである。

(大正十三年三月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或恋愛小説

——或は「恋愛は至上なり」——

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 芥川龍之介

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>